

イチモンジチョウの項で、1964年頃、比叡山の登山口となる修学院音羽谷がイチモンジチョウとアサマイチモンジとの混棲地となっていたことを述べたが、今はどんな状況なのだろうか。

一般的にイチモンジチョウにくらべてアサマイチモンジはその生息分布が狭く、北海道、四国、九州には生息しなくてみることができない。京都市修学院音羽谷でもイチモンジチョウに比べて本種は珍しいチョウという位置づけであったが、兵庫県播磨地区は、むしろアサマイチモンジの方が多くみられる稀有な地域のようなのである。幼虫の食草はイチモンジチョウと同じスイカズラで、5月から6月にかけてきれいな薄黄色の花を咲き誇らせ、アサマイチモンジの母蝶が産卵のためにその周辺を飛び交う光景が楽しめる。母蝶はスイカズラ若葉の裏側に産卵することが多いようだが、左図のように葉表に産卵することも少なくない。孵化した幼虫は、若葉の先端部から食い始め、インガケチョウやスミナガシの幼虫にみられる独特の糞塔を形成して枯れしおれた葉っぱをカーテン状にぶらさげ、葉脈の先端から糸状にのびた擬似葉脈にそっと静止して自身をその細糸と一体化するか、あるいはカーテンの陰に身を隠す。これらの習性は小鳥やハチなどの外敵に対するみごとなカムフラージュであるが、この習性を知る人間にとっては幼虫発



見の格好の目印となる。

近似種のイチモンジチョウとは野外で飛翔している姿をみるだけでは区別がきわめてむずかしく、右図のように静止した状態であれば、後翅上から4番目の白紋内側にある黒い2本の線状模様がV字を呈していればアサマイチモンジだと判定できる（イチモンジチョウでは平行線：下の標本裏面を参照）。また、羽を広げてくれている場合、標本図の前翅に着目して、下から3,4番目の白紋を直線で結んだ延長線が下の白紋の外＝右前翅なら右側を通り、イチモンジチョウでは内＝右前翅なら左側へとぐんと斜めに角度がついた延長線となることで、明確に区別ができる（参考のためイチモンジチョウ標本も示す）。

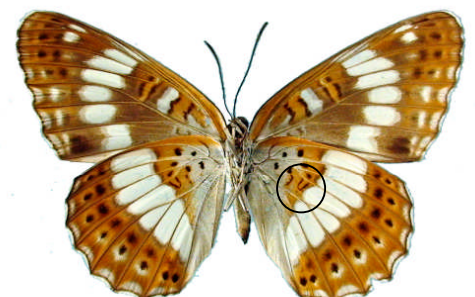


2009年5月下旬から6月上旬にかけては、播磨地区における絶滅危惧種I類選定ヒメヒカゲの生息調査で忙しいが、そのあいまにアサマイチモンジが複数頭、スイカズラの花が咲くまわりをスイスイとみごとな滑空をみせてくれるのが、眼の保養となる。1頭の♀を2頭の♂が追いかけて始めて展開される、3頭によるスクランブル飛行はなかなか見ごたえのある光景である。

和名は最初に発見された産地：浅間山にちなむ命名だが、世界で日本の本州にしかいない特産種であるだけに、大切にしたいチョウである。



Aug.5,1962 長野下諏訪
アサマイチモンジ ♀



裏面



July 4,1982 兵庫砥峰登山道
イチモンジチョウ ♀



裏面